

# だ い あ ろ く

東京彩人記

「福せきりが穠たきりを生む」。認知症がまだ「ぼけ」と呼ばれた1980年代からそう訴え、残る身体機能を生かして日常生活を取り戻す「生活リハビリ」を唱えてきた三好春樹さん(70)。介護を世話するだけの労働を超え暮らしを支える創造的な仕事ととらえ、携わる人らの共感を呼んできた。人材不足や新型コロナウイルス禍に苦悩する介護現場の課題を聞いた。

【野島恵】

介護保険施行20年。現場をどう見ているか。学生運動で高校中退後に職を転々とし、24歳で特別養護老人ホームに就職しました。入所者の多くが寝かせきりで同じ顔に見えた。試行錯誤して風呂に入ってもらい、顔が輝いたのを見て、お年寄りの今を変えられる、この方が世の中を変えられると実感しました。排せつや食事、風呂といった人の営みそのものを支える介護は、濃厚接触を伴います。欧州の多くの国で

はコロナ感染者の半数近くが高齢者施設に集中しました。日本では介護事業所関連の感染者も死者も少ない。免疫力の低い高齢者に接する現場の多くは以前から感染対策を施し、今回の感染拡大後は自主的に行動制限してきました。リスクのある環境で、ほぼ機能が維持されているのは現場の奮闘によりですが、任せきりはいけません。入所施設の面会制限や外出自粛が続き、お年寄りの生活動作を維持する力が衰

## 「生活リハビリ」を提唱 三好 春樹さん(70)



みよし・はるき 広島県出身。修道高中退。1974年、特別養護老人ホーム指導員。31歳で理学療法士。85年「生活とリハビリ研究所」代表。「オムツ外し学会」なども設立し、講演や実技指導で生活を立て直す介護を提起してきた。

### 介護で生きざま輝く

えるリスクが心配です。介護職の可能性を訴えられてきました。施設の職員配置基準(特養は入所者3人に職員1人)の多くは、私の新人時代と変わらず、給与も平均より低いままで。頻発する災害やコロナ禍で多くの人が漠然と生存の危機感を抱いています。排せつや食事を依存し、自らの認識もあいまいな認知症の高齢者らの不安と似ている。それでも、介護ではここにいてもいいのかと不安な利用者の徘徊や問題行動が、支え手との関係性の中で落ち着くことがある。時々々の工夫で生きさまが輝く。自分が生きていてよいのか、世界全体が求めるその間に、直接向き合う仕事が介護だと思えます。介護従事者はさまざまなキャリアの人が多い。人を

より、人の生きさまが深くなる姿でもある。人は全面的に生存の維持を誰かに委ねるようになって、誰かを全面的に信じていることができれば、穏やかでいられる。自立と若さばかり重視されなくてもいい。その人の今をどうするか。公的サービスも使って適切な依存をいかに作るかが、ケアプランの本質でしょう。生を究めて深め、生まれた時のような状態に還る。老いや生の変化をどう受け止めつきあうかは、関わる人自身の問題。年を取り物忘れや失禁も出たりする自らの未来と、どう付き合うかでもあるのです。

#### 記者の一言

ベッドの脚を切り、手すりをつけ、床に足のついた大勢のお年寄りの立ち上がりを支えてきた三好さん。寝たきりや無表情だった人の日常に戻る働き。排せつ介助など地道な作業も続く介護だが、それも織り込んだ手仕事の奥深さを「新しい知性」と呼び、伝える。

第1次予選 2次へ  
16日(日) 30 埼玉武蔵野野球場  
16日(日) 30 武蔵野クラブ  
16日(日) 00 東京L.B.C  
22日(土) 30 全府中野球倶楽部

### 都1次予選 14日開幕

クラブ・企業15チーム出場

ため無観客で行う。例年春に実施しているが、東京五輪・パラリンピック(延期)のため、活動自粛。トーナメント戦に臨み、残り4チームが11月22日から東京ドームで行われる本大会に挑